

会議録

◇詳細－長期計画担当課 電話03-3981-1111 内線2181・2

附属機関又は 会議体の名称	第7回 豊島区基本構想審議会第2部会	
事務局（担当課）	長期計画担当課	
開催日時	平成16年7月22日（木）14:00～16:00	
開催場所	豊島区議員協議会室	
出席者	委員	渋谷秀樹（立教大学教授）、岸井隆幸（日本大学教授）、四阿知子（一般公募）、粕谷一稀（評論家）、水島正彦（助役）、今村勝行（収入役）、高橋明宏（一般公募）、小林俊史（区議会議員）、中田兵衛（区議会議員） 以上出席者9名（敬称略）、欠席者3名
	幹事	政策経営部企画課長、同財政課長、同行政経営課長、同広報課長
	その他	政策経営部長、総務部長、区民部長、商工部長、清掃環境部長、都市整備部長、土木部長、選挙管理委員会事務局長、監査委員事務局長、施設再構築・活用担当課長、総務課長、区民活動推進課長、文化デザイン課長、生活産業課長、計画管理課長、都市計画課長、公園緑地課長
公開の可否	公開 傍聴人 0人	
非公開・一部公開の 場合は、その理由		
会議次第	案件 1. 開会 2. 議事 (1) としま戦略プランについて (2) その他	

1. 開会

事務局： 只今より豊島区基本構想審議会第2部会第7回目を開会する。本日、森田会長、二ノ宮委員から欠席の連絡を頂いている。それでは、部会長お願いします。

2. 議事

(1) としま戦略プランについて

(2) その他

渋谷部会長： 本日は暑い中、またご多忙中のところご出席いただきまして、誠にありが

とうございます。本日の議事は、手元の議事次第にあるように、(1)「(仮称)としま戦略プランについて」、(2)「その他」となっている。これまで審議会の全体会で「全ての体系に共通する指針」「分野別体系」について審議をいただいた。今回の部会では、基本計画期間内に優先的に進める施策である「(仮称)としま戦略プラン」について審議をお願いしたいと考えている。当初は分野別の計画事業について審議をお願いする予定であったが、審議の都合上、「(仮称)としま戦略プラン」について審議をお願いすることとなった。今回は当部会の分野のこと、第1部会のことを含め、トータルで審議をお願いしたいと考えている。なお、本日の部会での意見等については、審議会全体会へ報告し、改めて審議会として取りまとめたいと考えている。それでは、「(仮称)としま戦略プラン」の位置づけと、「(仮称)としま戦略プラン」の背景等について、事務局より説明をお願いします。

事務局： 〈資料Ⅱ-7-1、Ⅱ-7-2に基づき説明〉

渋谷部会長： それでは、「(仮称)としま戦略プラン」について審議をお願いする。事務局からの説明があったものは、あくまでも議論のきっかけであるので、これにとらわれず、意見をいただければと考えている。本日は、こうした観点から全委員の思いを最初に述べていただき、その後に部会として、これだけは優先して進めるべき事項だという共通認識がなされたものについては、部会案として審議会に報告することとする。それ以外の各委員からの意見については、委員からの意見として報告したいと考えている。早速、各委員から意見を伺いたいと思うが、昨日第1部会が先行して開催されており、その様子を事務局から先に説明いただいた方が議論が集中的に進むと思われるので、報告をお願いしたい。よろしく申し上げます。

事務局： 昨日、同じ資料を配布し、第1部会でも「としま戦略プラン」について審議をいただいた。その審議の概要について説明をさせていただく。まず「としま戦略プラン」の位置づけについて各委員の共通認識が冒頭得られにくかったということが挙げられる。例えば、資料Ⅱ-7-3に記載されている計画事業と「としま戦略プラン」との関係である。本来、計画事業として掲げるものについては優劣をつけにくい。必要であるものは基本計画に載せていくということが原則であり、計画事業についてはいずれも重要であるという認識は統一されたところである。一方、計画事業のうち、ある幾つかのものを先行プロジェクトとして位置づけることで他の計画事業への進捗により影響を及ぼすこともあるのではないかとということが議論となった。また、計画事業を満遍なくやっていくことが基本構想の実現にはつながるわけであるが、「としま戦略プラン」として位置づけることで豊島区らしさというものも出せるのではないかと議論もなされた。それから、本日の資料Ⅱ-7-2

にある「課題」との関係であるが、例えば、都市の地盤沈下、都市の脆弱性、ファミリー世帯の減少等の課題があるが、これらの課題を解決することこそが戦略プランではないかという議論もなされた。また、事務局で抽出した課題に、まだ漏れている課題があれば、それについて追加をして、その解決策として戦略プランを選定してもよいのではないかという議論もされた。そうした意味では、施策の体系に載っていない新たな課題についても戦略プランに位置づけることも可能ではないかという議論もされた。また、昨日の議論の中では、資料Ⅱ-7-2にある戦略プランにより目指すべき方向の「住み続けたいまち」については戦略プランの中で大切にしていきたいという意見が多く出されていた。概要は以上である。

渋谷部会長： どうもありがとうございました。以上、昨日の部会の様子を報告していただいたので、本日の議論の参考にしていただければと思う。突然、指名して意見を伺うというのも恐縮であるが、事務局から説明があったようにすべて大切である計画事業等の中から、何を優先して手をつけていくのかということについて各委員から意見をいただきたいので、M委員から順番にお願いしたい。「としま戦略プラン」として、何を先行すべきかという議論である。

M委員： 資料の「課題等」などを拝見しながら思うことは、豊島区では文化を中心として、まちの魅力をつくるということを掲げていて、それも大事であると思うが、私はやはりこのまちで単身世帯が増え、ファミリー世帯が減っているということが一番大きな問題であると考えている。いろいろな条件が重なってこのような状況になっていると思われるが、やはり子どもを育て、このまちで一生暮らしていく、そういった魅力が、私は住んでいていいところだと思っているが、やはり客観的に見ると欠けていると正直思うところがある。例えば、現実的に家を購入して住もうとすると高過ぎる。また、治安も決して良くない。都市のイメージも悪いかもしれない。利便性はよいといった利点もあるが、全体的には非常にバランスが悪いという印象である。そこで、このまちのイメージを変えるために文化というテーマを打ち出していることもよく理解はしているが、行政の限界性という課題が挙げられているように、行政が文化というテーマを打ち出せば、魅力づくりに貢献できるのかという決してそうではない。そこで私は、このまちにファミリー世帯が住み続けられるようにするというように、ターゲットを絞るべきだと考えている。ターゲットを絞ることが最重要である。何をやるかということよりも、住民が減少しているのであれば、どの世帯の住民を増やすかというターゲットを絞ることが最優先だと考えている。漠然としてはいけな。芸術、文化というのはよいが、どのターゲットに対してそれを打ち出しているのが明確になっていない。個々の課題よりも、それぞれのターゲットを絞るこ

とが最優先なのではないか。まず、この議論をして、その後にそこに対してアプローチをかけるには、どういう手が必要なのかを考えていくべきなのではないか。漠然と話を進めているきらいがあるので、なかなかこの議論は全体的には難しいだろうという印象が否めない。とりあえずこのような印象である。

渋谷部会長： ありがとうございます。順番に発言してもらおう予定であったが、重要な問題提起があったので、M委員の意見に対して何か意見があれば、まずそれを伺いたい。

I 委員： この戦略プランは非常におもしろいと思っている。一つ伺いたいのであるがこれは会長や渋谷部会長が事務局と協議して発案したものなのか。それとも事務局から提出されたものなのかを教えてください。

事務局： 本日の資料は、事務局で用意させていただいたものである。

I 委員： そうではなく、「としま戦略プラン」については、私が途中で欠席したこともあるせいか本日初めて伺ったのである。それなので、このプランを誰がどういう形で考え出したのかを聞きたいのである。

事務局： 今までは分野別の施策の方向等を審議いただいていたが、その中で基本計画の期間内に「優先的に進めるべき事項」、また、審議会の部会あるいは全体会の中で出された意見であるが「豊島区らしさを創出する事項」、そういったものを打ち出して、区民にアピールをし、区民と行政とで同じ認識を持って、地域づくり、まちづくりを進めていく必要がある。こうした認識から、分野別の体系だけではなく、基本計画期間内の優先的に進める事項として、この戦略プランを発信していきたいというのが区の考え方である。

I 委員： それは区長が発案したのか。あるいは、担当部長が考えたのか。それともこの審議会で考えたのか。最初は誰の発案なのかを聞いているのである。

事務局： これは区長をはじめとする区である。

I 委員： 私はM委員と異なり、生まれたときから豊島区に住んでいる。長くこのまちで暮らしてきて、どうしたら魅力を高めることができるかということを頻繁に考え、考えさせられている。例えば、資生堂の福原氏が座長を務めている文化懇談会では、福原氏の提言で後藤和子氏という埼玉大の若い先生がメンバーになっている。そこで後藤氏が提言されたのは、文化経済学という概念である。文化と経済とは、実は様々な接点があり、「文化の風薫るまち」という言葉は、それだけが単独であるのではなく、やはりまちが元気で、経済が活性化してなければならぬものなのである。逆に言えば、文化と無関係に経済の活性化が図られるものではないということである。これは新しい見方で非常におもしろかった。確かに鬼子母神のお会式や巢鴨地蔵の縁日など文化的な事業、文化的な催しがあると自然に人が集まり、そこで消費も行わ

れる。これは直接、経済の活性化につながる。元気を出すために、お祭りをやるということに近い考え方である。また同時に、例えば路面電車を建設したり、駅前を整備したりすることにより、まち全体が活性化すること、非常におもしろく、大事なことである。路面電車自体が暮らしや文化を考える上で基本ベースになり得る。これに賛成するか、反対するかは、どちらでもよいが、ただこれが1つの改造する力をもっているのではないかと考えている。しかし、単にこれだけでは駄目であり、池袋や豊島区の町々がどういう歴史的な形成過程を経てきたのか、由緒ある神社や仏閣の由来や機能も解き明かしていかなければならない。そういった中で、住宅街というものが1つの憩いの空間として魅力が出てくれば、単身者だけではなく家族として住みやすいということにもなると私は考えている。この「としま戦略プラン」もよいが、これと今までの積み重ねてきた議論をもう少し一緒にしていかないと具体的なイメージはわいてこないのではないかと。

渋谷部会長： これまでの基本計画の議論ととしま戦略プランは恐らく一緒のものである。一緒のものであるが、どちらかというとも基本計画は総花的なところがあるので、ある意味で力点を抽出するものがとしま戦略プランということなのではないか。

I 委員： それには賛成している。緊急性、必要性、優先性、将来性という軸で切ってみたらおもしろいと思っている。例えば、緊急性でいえば、駅前を改造してグリーン大通りを活性化するというのは非常に緊急性が高い。それから外国人との共生というテーマもある。「多様なコミュニティがあるまち」の柱の中にある「外国人との共生」は大事なことであり、緊急性が高い。石原慎太郎知事が池袋に来て、犯罪が多い街であると言われ、私には納得できないが、東京の中で一番犯罪が多い街なのではないかと勘ぐってしまう。池袋という街は外国人が多く、これはもちろん様々な犯罪ともつながっているかもしれないが、同時に外国人との共生という大きな可能性も絡んでいる。池袋という街は、アメリカの国内では、「東京へ行ったらまず池袋へ行け」と記載しているガイドブックがあるくらい知られているまちなのである。池袋は、犯罪のまちということではなく、外国人が住みやすい、旅行先として利便性の高いまちだということなのである。そこをもっと強調して、外国人との共生、単に共生ではなく、要するに外国人が東京で住むのであれば豊島区に住もうという気持ちを起こさせるくらいのまちを目指してはどうか。最も外国人との共生がうまくいっているまちであるということが、もし国際的に認知され、評価されるようになれば、それだけで豊島区は個性を持った魅力的なまちになるのではないかと。そういう意味でいえば、路面電車も大事であり、外国人との共生というテーマも大きく話題とするに足るテーマだと思う。

渋谷部会長： どうもありがとうございました。M委員から、ファミリー世帯が住みやすいまちということがやはり重要だという意見があり、I委員からは、文化を充実させることが魅力的なまちにつながるのではないかという提案であった。また、外国人が多く住んでいるまちなのであるから、そこを強調し、日本人も住みやすく、かつ外国人と共生できるようなまちづくりと進めるべきであるという提案であったが、これらの意見や焦点の当て方について意見があれば伺いたい。

M委員： 豊島区は難しいところがある。これだけの繁華街・池袋を抱えているため、池袋を活性化させ、来訪者を増やし、これによりまちを活性化させようという議論になってしまう。これは大事なことであるが、これで定住者が増えるわけでは決してない。そこで、池袋を中心としてこのまちを商業都市として捉え、来訪者を増やして活性化させる方向を選ぶのか、それとも違う道を選ぶのか、それらを同時に目指していくのか。この辺りをはっきりしなければならぬのではないかと。基本計画を見ていると、すべて盛りだくさんになってしまっている。行政が策定するものであるので仕方ないと思うが、ある程度どこを中心にやっていくのか、何をターゲットとするのかを考えていかなければならないのではないかと。やはり物事には順番というものがあるので、優先順位はつけなければならないのではないかと。

渋谷部会長： まさに戦略ということであるが、この点はいかがか。

○委員： 私も戦略プランというものは、もう少し目標、目的を煮詰めてから議論に入らないと、それぞれが考える“戦略”がかみ合わないのではないかと懸念している。これまでの基本計画の体系をつくっていく審議の中では、それぞれの方針と政策を分類分けし、必要なもの、漏れているものがないかという確認をしながら進めてきた。しかし、本日示された戦略プランについて審議するという事は、最終的な目標をどこに掲げるのかということに通じている。財政面を克服することや定住者が生き生きと暮らせるような視点が、緊急性や必要性の面から軸となるのか。この軸がはっきりしないと、戦略プランのための課題を議論しても、切り口が変わってきてしまうのではないかと。その中で、我が区の基本構想審議会が決めたのは、「未来へひびきあう 人 まち・としま」というテーマであり、私のイメージとしては最終的な目標は、行政と区民がいかに響き合って暮らしをつくっていけるかということである。響きあえる豊島区になれるかということが最終的な目標になるのではないかと私は認識している。これはつまり、協働の仕方について区民と行政と議会、豊島区全体が協働の仕方についてチャレンジと取り組みをしていくことにつながってくると考えている。そこで本日示された「としま戦略プラン」をみると、目的が2つ示されている。「持続可能なまちづくりを進める」と

「としまらしさを創出する」とあるが、私のイメージとは異なる。そこで、この目的を事務局としてはどういう思いで挙げたのかについて、もう一度伺いたい。

事務局： まず、「としまらしさ」については、先ほども申し上げたとおり、基本計画の総花的なものでは、豊島区が何を指そうとするのかが不明確であるため、それを明確にしようとする意図である。基本計画という冊子から「豊島区」という文字を隠したときに、どこの計画かわからなくなってしまうようなものにしてほしくないためにも、豊島区らしさを出すことが戦略プランの1つの考え方である。また、「持続可能なまちづくり」については、ただいま〇委員から発言があったように、基本構想の将来像「未来へ ひびきあう 人 まち・としま」からわかるように、地域との協働、あるいは地域の企業、ボランティア団体等との協働を通じて、未来永劫に豊島区があり続けるための戦略として、本日の資料にとりまとめた次第である。

〇委員： この目的がよいか悪いかという議論をするつもりはない。しかし、事務局は協働、オリジナリティを挙げたが、私が戦略プランとしてイメージするのは、いかに響き合って暮らしをつくっていきけるかということである。そういう意味では、区民参加、または協働のあり方については今すぐ始めるべきことと、将来も優先的に必要であることという切り口として捉えたい。もう1つの軸としては、区のサービスが持続可能であるかということが最大のポイントである。それぞれの施策・サービスには受け手側の区民がいて、そのサービスはなくさないでほしい、そのサービスを増やしてほしいという声はどこでも聞くが、果たしてそれは本当に持続可能な施策、サービスなのか。将来を考えると続けることができないとわかっていながら、一時の満足感で5年間だけ喜ばせ、あとは他の自治体に行って楽しんでくださいといった話では、基本計画に記載されているような「住み続けられるまち」にはならない。持続可能なサービスを構築するためには、まさに区と区民がお互いに響き合いながら暮らしをつくっていくという活動をしなければいけない。そうすると、やはり原点は、行政の情報伝達、区民に対する教育制度であり、子どもに対してもよい暮らしをつくっていく行政のあり方をどう教育していくかということにつながっていく気がする。今、私が非常に心配していることは、実態は知らないが行政サービスの受け手になっていて、最後まで実態を知らないまま、突然、行政の方針でサービスが切られたときに、大きな疎外感に占められてしまうことである。区民は今後、限りある財源の中で、どのサービスを求め、どのサービスを切り捨てなければいけないかを判断しなければならず、これについて熱く区民の間で語らなければいけないが、それを語っているのは行政と区民という対立軸の中でしかない。これでは、基本構想にあ

るような「未来へ ひびきあえる 人 まち・としま」にはならないと思う。そこで、この戦略プランで私が一番重要に考えたい緊急な課題とは、大人から子どもまで含めて、暮らしの仕方について教育をすること、情報伝達をきちんとするということである。それこそ戦略に値する活動になるのではないか。

渋谷部会長： G委員、何かあるか。

G委員： 私も行政と住民がひびきあうことというテーマに賛同であり、速やかな対応というものを私は優先していただきたいと考えている。私事であるが、昨年からは新しい仕事を始め、その仕事の相手は小学校であるが、私の担当は、先日本水害の被害を受けた新潟県三条市、見附市等である。これらの地域とメールでやりとりをしていると、見附市はものすごく行政の対応が早く、学校のホームページの立ち上げ方1つにしてもリアルタイムでもとても反応が良い。一方、三条市はホームページを見ても、最終更新が5月といった感じで、水害のことについてもわからないという状態である。水害時の避難命令についても三条市は対応がとても悪かったと聞き、なるほどと思った次第である。豊島区についても、水害といった問題は緊急な問題ではないが、様々な住民の要望を吸い上げ、それに対する反応が速やかであるかを考える必要がある。私はここに住んでいて、区からのいろいろな情報伝達が住民にうまく浸透していないと常に感じている。このテーマは「持続可能なシステムの構造改革の必要性」という部分にある程度入るかと思うが、意思伝達のシステムがもう少し簡素化され、そして住民と区がもう少し速やかな反応で話し合い、決めていくことができればよいと常々感じている。また先日、豊島区の組合の折り込みチラシが新聞に入っていたが、図書館のことに関していろいろ記載されていた。しかし、図書館がなくなっていく方向にあることをほとんどの住民が知らない。私の友人に話しても驚く人がほとんどであり、結局住民の方もよくアンテナを張っていないと何もわからないままにいろいろなことが決められていってしまうという感覚を持っている。知ろうとしない住民が悪いと言われればそれまでであるが、もう少し、広報などコミュニケーションが向上するようなシステムを、もし最優先とする戦略プランというものがあるのであれば、そこで取り組んでいただきたいと考えている。一方、「としまらしさ」というものは創り出そうとして創れるものではなく、結果として出てくるものではないか。例えば、老人に優しい江戸川区、医者がない練馬区など、住民の間で区を代表するようなフレーズが自然とできているような感じがある。

渋谷部会長： 非常に重要な視点である。ひびきあうまちについて、J委員から情報の関係で意見をお願いしたい。

J委員： 本日、突然「としま戦略プラン」が議題となっていて驚いたが、戦略プランというものを本当に戦略的にやるとするならば、メリハリを相当つけることになるので、反対する人も相当多く出てくるのではないか。戦略性のあるプランというものは、10個のことに10の力を入れるのではなく、ターゲットを絞って取り組んでいくというものであるので、こういった審議会のような組織で策定するのは相当難しいのではないか。

渋谷部会長： 行政のリーダーシップが当然いるということであるが。

M委員： 今、なぜこの戦略プランを考えなければいけないかということについてもう少し伺いたい。いろいろな事情は何となくは想像できるが、なぜ今「としま戦略プラン」を検討しなければいけないのか。その必要性は何なのか。これが明確にならなければ、ターゲットを絞りようがない。J委員も指摘されたが、戦略というものは、優先順位をつけて、どこかに持っている力を集中的につぎ込んでいくものと私も認識している。もちろん戦略を立てた後、戦術をもって取り組んでいくわけであるが、私はこのような認識をしているので、まずこのあたりから聞かせていただきたい。

渋谷部会長： 事務局から説明をお願いしたい。

事務局： まず「としま戦略プラン」であるが、6月に行われた審議会の全体会の中で資料として一度提出しているが、新基本計画の構成案の中で「分野別の体系」と「全ての体系に共通する指針」があり、それらの上に「としま戦略プラン」が基本計画の計画期間内に優先すべき事項としてあり、後日提案をさせていただきたいということ案内した。なぜこの時期にということであるが、冒頭に部会長から説明いただいた通り、当初は分野別の計画事業の審議をお願いする予定であったが、「としま戦略プラン」として基本計画期間内に優先的に進めていくべき事項を審議した上で、それぞれの分野別体系の計画事業の審議に入ったほうが審議の流れとしてもスムーズになると判断したということである。そうであるので、必ずしもこれが現在検討している新たな行財政改革との連動は一切ない。

M委員： その回答で結構である。では、なぜ今、基本構想審議会です新たに基本構想を策定しなければならないのか。現行の基本構想があるのになぜ今、作り直しているのかということ伺いたい。

事務局： 当然、現在も動いている基本計画はある。また、昨年、基本構想を答申いただき、区議会でも議決をいただいたわけである。なぜ今、新たな基本構想、基本計画を策定しているのかということであるが、新たな基本計画の審議に入ったきっかけは、やはり地方分権改革とこれに伴う都区制度の改革も進み、基礎的自治体として区がある程度の自己の責任、自己の決定において地域づくりが進められるシステムに変更されたということが挙げられる。こうした

国レベルでの大きな変革の時代を迎えている中で、やはり新たな視点で区政運営の最高指針である基本構想、またそれに基づく最上位の計画である総合計画を新たに策定する必要があると判断した。財政面でみると、疑問の声もあるが、こういったことが策定の背景にある。

M委員： 概ね理解した。もちろん地方分権の話や国レベルでの改革の話は当然あるが同時に豊島区は現状のシステムのままで持続するのが難しくなったということが背景にあるのではないかと私は考えている。ここで改革をしなければならなくなり、全体的に展開していた政策を、ある程度考え直し、見直していかなければならないと判断したのではないかと。そこで、このまちがこれからの地方分権の時代に生き残っていくためにどのようにして新しい魅力をつけていくべきかを考え、示していく必要があるから、今、基本構想・基本構想を策定しているのではないかと。こういった考え方で落とし込むと、何をやらなければいけないという話が出てくるのではないかと。

事務局： 指摘の通りの認識である。

M委員： これをはっきりさせておかないといけない。

渋谷部会長： これは私見であるが、やはり一番初めの基本構想の段階で、軸とすべきものがぼやけていたため、ある意味で議論の重点、議論の軸をもう一度確認する必要があるということが、恐らく事務局としてこの案が出てきた背景だと認識している。基本構想のときに出された「未来へ ひびきあう 人 まち・としま」に収束するのは当然のことであるが、この観点からもう一度これまで議論してきた計画について考え直してみるとということが本日の課題であると思っている。そこで、G委員から提案があったようにもう一度、様々なことを確認して、次の具体的な計画に移るといったことが必要なのではないかと。ここでもう一度確認し合うことが議論の中心にある。そうした場合には、他にもこれは大事であるという意見があれば、発言していただきたい。

B委員： 本日は、遅刻して大変失礼した。これまでひびきあうというキャッチフレーズで基本構想を描き、各分野の議論をしてきた結果が、本日の参考資料である。この資料には確かに網羅的にすべて盛り込まれているが、やはり平板であるという印象は拭えず、行財政の状況が厳しい中で、メリハリをつけたいという気持ちを推察する。資料Ⅱ-7-3に「計画事業の一覧」がそれぞれの体系を具体化する事業というような形で、体系別に整理されているが我々が今考えるべきことは、限られた資源と人材と時間の中で、豊島区が特に重点にしてやるべきものは何かをはっきりさせることである。これが戦略プランを描き出すことにつながってくるのではないかと。基本構想や基本計画の議論の中で重要視してきたことは、個別の施策を行政がやるべきなのか、区が責任を持ってやるべきなのかという1対1対応のレベルの問題ではな

かったか。つまり、流行の協働のまちづくりという話になってしまうが、豊島区ではそれを「ひびきあう」という言葉で多分表現しているので、私としては例えば戦略プランを描くということは、ひびきあうようなプロジェクトを重視するということであると思う。簡単に言うと、個別の計画事業が上がってきているが、市民、企業、行政が響き合っていないプロジェクトは戦略プランから除外し、重点化しないと判断すべきである。ひびきあうプロジェクトを重点化して取り組むということ、はっきり打ち出すことが戦略プランとしては重要なのではないか。各課の個別事業が、どうやって市民とタイアップしているのか、他の施策とタイアップしているのかを明らかにすることが、基本構想における「ひびきあう」が狙っていることなのではないか。「ひびきあう」プロジェクトを優先することが大事なのではないか。2点目は、従来の基本構想を眺めていると、やはり豊島区や池袋を中心としたまちのイメージに対して非常に強い意識・関心を持って計画を作ってきている。至るところに文化という文言が出ており、このまちとしては大事にしたいということ宣言している。このような経緯からも東京の中で芸術・文化のまちとして頑張るということを明言してもよいのではないかと私は考えている。つまり、芸術・文化のまち創造につながるプロジェクトは大事にしてよいのではないか。例えば、1本の道路を建設する場合にも、その道路がどのように芸術・文化のまち創造につながっているのかを説明できる事業を大切にすべきということである。普通に粛々とやる事業ももちろんあるが、重点化することとは、こういうことではないか。つまり、第1部会では、連携して、協働して推進するプロジェクトの大事さを謳っており、第2部会では文化というものがキーワードになっていた気がするので、これらにつながるものが説明できないプロジェクトは粛々と実行するのはよいが、重点化はできないと割り切ったらどうか。3点目は、一方で区政の運営システムの話が多少議論になったことが挙げられる。従来の運営のシステムでいいのかどうかという部分については、十分に議論ができていない気がする。例えば、戦略プランがこの場で決まり、これが基本構想・基本計画の中に反映されていくというプロセス自身に何か従来の区政と違うシステムをもし説明できるならば、しっかりと説明した方がよい。区民のニーズをどう汲み上げ、重点化プロジェクトをどう見直していくのかについてもしっかりと考えるべきである。新しい区政運営についての何か重点化の話があってもいいのではないかと感じている。以上3つの点を述べたが、戦略プランとして打ち上げるならば、個別事業から大事なものを抽出するのではなく、その事業の進め方についてその視点を説明できる事業を戦略的に取り上げるべきであるという整理を提案したい。

渋谷部会長： ありがとうございます。

J委員： 戦略的なプランを本当に考えるということについて、この中で唯一、純粋に民間会社に勤めている立場から申し上げる。もし民間企業で考えれば、財政再建が第1番の戦略となる。とにかく増収増益になることを最優先にする。区財政の負債が大きい状態では、福祉を向上させる、暮らしやすいまちをつくると言われても何もできない。それよりもとにかく財政赤字をなくしていくための施策を優先的に実行する。それ以外の施策は、後で豊かになれば実行できるわけであるから、最初にやらなくてははいけないのは財政再建につながるものであると私は考えている。

渋谷部会長： 今の意見に対して何か意見はあるか。M委員、お願いします。

M委員： そのとおりである。本日の資料Ⅱ-7-2に課題が9つ挙げられているが、これらは3つずつ分けられる。いわゆる商業都市、都市間競争の絡みのものが3つあり、ファミリー世帯や地域コミュニティの衰退の関係が3つあり、あとは行政の限界性に関する話が3つある。この課題設定がすべて正しいとすると、この3グループのうちどれを優先的にやるかという話になるが、やはり優先事項としては、一般的に考えれば、財政の立て直しになる。その後に残りのどちらを選ぶかという話になるのではないか。まず、本当にこの課題設定でよいのかを議論しなければならない。

I委員： B委員、J委員、M委員は皆、賢明な意見を述べている。私もこの資料を見ていると、区政の悲鳴が聞こえてくるような感じがする。計画策定の背景の説明を聞いていると顕著である。しかし一方で、こんなに悲観的な材料ばかりなのかという疑問もある。例えば、都市の地盤沈下という課題があるが、これは東京の地盤沈下ということなのか、それとも豊島区の地盤沈下ということなのか。日本全体の視点で見れば、東京は例外的に景気がよく、大阪のひどさとは比べようもない。他の地域が混迷している中で、東京は成長が持続している側面があり、活力のある都市である。六本木ヒルズなど再開発が多数行われているのを見ると東京の地盤沈下ではないと思われる。そうすると、これは池袋及び豊島区の地盤沈下ということになる。例えば、池袋に降りる乗降客が非常に少なくなっているということも地盤沈下の1つの現象であると思うが、そうであれば、B委員が提案されたように、大事なことは文化につなげた活性化である。重点施策の優先順位については、文化につながる活性化を考えられたらよいと思うし、私はそれを進めるべきだと考えている。一方、少子高齢化社会というのは豊島区で考えたところで意味がない。日本全体が直面している大きな課題である。こういった課題よりもJ委員が指摘されたように、特に財政再建というのは緊急のテーマである。財政再建に関して具体的な例を挙げると、先ほどG委員が発言されたように図

書館が大変な状況である。図書館については興味を持っていろいろ調べているが、23 区の図書館はおおむね崩壊状態である。図書館司書が次々といなくなり、事務職員が図書館の館長を務めている状況である。また、出張所についても、私の家の近くにあった第4出張所は廃止され、現在は空き家になっている。選挙のときにだけ使用しているが、区財政からみると出張所は大きな負担となっていたのである。そして、必要のある区民はみな本庁舎まで来てほしいということになった。私は、出張所を閉鎖することも、図書館が5つから4つになることも仕方ないと考えている。しかし、建物の数という問題よりも、図書館という機能が崩壊していることの方が大きな問題と捉えている。これは豊島区だけでなく23区全体が同じ状況のようである。しかし、豊島区は現在、東池袋に図書館と劇場を配置した複合施設を建設しようとしており、私はこれが再生のきっかけになると考えている。図書館の数が5つから4つ、3つと減少してしまうが、この東池袋の中央図書館によって、少ない人数で、少ない予算で、もっと図書館としての機能を立派に備えた、役に立つ図書館にすることは可能であると思っている。G委員からこういったことについての情報発信が少ないという話もあったが、ぜひもっと関心を持って、大いに議論するべきである。こういう委員会だけではなく、図書館の関係者も議論に参加すべきであるというのが私の感想である。個々に情報や理解が行き届かない状況で、様々な文章が書かれ、意見が言われるので、もっとお互いにフランクに、素直に議論すべきなのである。ただし、壊してはいけないもの、区政の根幹になるようなものが崩壊状態にならないようにすることが一番大事である。例えば、財政難でまちづくり振興公社を合併したり、時習小学校を売却したりといったことは本当に深刻な事態だと思う。これらについても、もう少しフランクに議論を巻き起こすような形でオープンにすれば、いい知恵がきっと浮かんでくると私は思っている。一番問題なのは、どんな場合も困難な事態から目をそらして逃げることである。豊島区はこれまで70年も続いており、その間には戦災もあり、いろいろな経験をしているので越えられない困難はない。また、低成長あるいはマイナス成長と言われているが私は見誤っている気がする。来年くらいからかなりよくなるのではないか。この計画の前提としても税収がさらに少なくなるとしているが、そのようなことはないのではないか。だから、増収となる工夫をし、少しでも税収が増えれば、無駄をせずに優先順位を決め、重点的に進めていく限り、区政の運営は可能であると私は考えている。

渋谷部会長： ありがとうございます。この辺で行政側から意見をいただきたい。S委員からお願いします。

S委員： 私は昨日の第1部会にも出席していたが、そちらでもやはり、なぜ戦略プラ

ンを考えなければいけないのかという共通認識を構築できなかったことが一つ挙げられる。最終的に部会長のまとめで一定の方向を出してくれたものの難しい面があった。また、庁内でも戦略プランについて意見交換をしているが、戦略プランの性格は何かということをもう一度確認したい。昨日も申し上げたが、基本計画とは基本構想を実現していくために、それぞれの分野にわたる施策を総合化・体系化しているものであり、基本計画のスパンを10年とすれば、それを推進することによって基本構想で謳っている「ひびきあう 人・まち」が達成されるという受けとめ方が素直である。その上で戦略プランと策定するのであれば、それは戦略ということなのであるから、まさに基本計画を推進していく上での大局的な方策のことなのではないか。すべての施策が重要である以上、優先すべきものはそれなりの理由を鮮明にしなければならない。これまで、優先的に進める施策をプロジェクト化する、さらに、体系をまたぐ施策をプロジェクトとしてまとめるという2つが戦略プランの考え方として挙げられているが、私はいわばこれはリーディングプロジェクト的なものであると理解している。基本計画に載っている施策は大切な話なので、いずれも取り組まなければならない。そこで戦略プランは全体を効果的に進めていく上でのプロジェクトと位置づけていいのではないか。先ほどM委員が発言された資料Ⅱ-7-2に課題が9つ挙げられており、この課題設定の評価は様々であるが、こういう課題がある以上、これをまずクリアする必要があるのではないか。それが戦略なのではないか。福祉や教育に関する施策が各分野に位置づけられているが、いずれも区民にとっては重要な施策である。しかし、これらを進めていく上では、それを裏打ちするものがなければ推進することはできない。それが何かというと資料にあるような「価値あるまち」、「住みたいまち」ということなのではないか。そのためにこの課題をクリアする必要がある、そうすることによって、例えば2大財源の1つである住民税の増収が見込まれる。ここまで流れを考えなくてもよいのかもしれないが、どうしてもこの課題をクリアしなければ、基本計画に取り組んでも目的を達成することはできない。後段は私見であるが、この課題をクリアするための施策が戦略なのではないかと考えている。財政再建もそうであると私は捉えている。

R委員：遅れてしまい申し訳ない。S委員と同じような意見になるかもしれないが、私も「としま戦略プラン」の位置づけ、あるいは理解について発言させていただきたい。本日、我々は資料を提出した側の立場であるが、この戦略プランについては内部でもいろいろ議論したものの、まだ方向性が決定したわけではない。とにかく各委員の意見を伺おうということで本日、議論の時間をいただいているわけである。この議場には大勢の管理職がいるが、戦略プラ

ンについては個々にそれぞれ思いがある。これまでひびきあう都市を目指すというキャッチフレーズのもとに新しい基本構想を審議いただいているわけであるが、きわめて厳しい財政状況のもと、どうやってそれを実現していくのかはとても大きな問題である。そこで、これは1つの戦略を立てるべきではないかと考えた次第である。基本計画全体を貫く柱として、分野別の共通する指針として戦略を立てようということである。その「せんりやく」という意味は、浅くて卑近な、簡略なという意味の「浅略」ではなくまさに戦いのことである。戦術よりも広範囲をカバーする作戦計画、謀、目論見ということである。つまり、単純に時代背景から必要性を抽出し、ある視点から選択するという形で事業に優先順位をつけるということではないと私は考えている。問題はそのやり方なのである。ある文化事業を区民の文化度を上げることによって達成しよう、区におけるファミリー層定住促進については所得の視点からこの施策は達成しよう、あるいは先ほどB委員が発言されたように行政の内部に問題があるとすると、新しい公共経営論をベースに財政再建を最優先してやっ払いこうということである。こういう戦略を以て貫いていく事業がいろいろなところから抽出されてくるのではないかと私は考えている。冒頭に申し上げたように戦略プランについては、庁内で確定したものがあってもなく、私自身、区長の片言隻語を受け止めて、こう考えている次第である。

渋谷部会長： どうもありがとうございました。いずれもが密接につながっているところがあるので難しい。

○委員： 話を伺っていると、R委員の考えと私の考えは割と近いところにある。戦略プランをなぜ策定するかということについては、R委員が謀と言われたが、まさにその通りで、実は財政再建や現状で見えている課題の克服は本当は戦略にならないような気がする。むしろそれを含めて目標到達の先に何かあるのかということが大事なのであって、まさに響き合える区の運営システムに変えていくということが今度の基本構想と基本計画の中で一番大事なことなのではないかと私は認識しているということなのである。B委員が発言された運営システムを変えていくというテーマはそこにあると思っている。もしこれが変わらなければ、単なる今までの仕組みの中で政策の選択を変えていくだけという話になる。基本構想を新たに策定し、基本計画も新たに作り直すという作業においては、そこが大きく変わらないと、豊島区の新しい方向性にはならないのではないかと。I委員が発言された図書館の話もそうである。例えば、行政についてある課題やテーマを持ってサラリーマンの人が土日勉強する場所があるのだろうか。月曜日から金曜日の間にその担当課の課長に話を聞きに行かなくても、土日調べることができるようにするのがま

さに図書館の役割であり、行政の情報公開コーナーの役割なのである。また、そのことについて相談する相手が地域の中にいるのか。町会長なのか、それとも相談員なのか。そして、その研究レポートを行政の誰かに訴えられるのか。豊島区で現在の施策についてものを言いたい時に、区民がある短期間に研究した成果を発言ができるのだろうか。そういう仲間が増やせるかどうか。「ひびきあえる 人 まち・としま」の中で一番大事なことなのではないか。このように区の施策について興味を持って研究している人が増えてくれば、選択は非常に密度の濃いものになっていくのではないか。逆に行政から区民と響き合えていないと実感することがないのかを私は聞きたい。例えば私の体験では、町会長のところに区政連絡に行き、ある施策について説明をし、納得をしてもらっているが、時には「そんなことはどうでもよい」「そんな難しい話はしてもらっても困る」「他のことの方が大事だ」という話になって伝わらない場合もある。とりあえず時間の中で町会長に説明をしたので、地域の方には伝えておいてくださいということで帰ってきてしまうことは経験されていないか。私はそういう現場で「町会長、本当にそれでいいのか。」と思っている。また、このような審議会にも区民公募のメンバーが加わるようになってきているが、以前であれば、区民公募といっても町会長の代表のような人が参加していた。その人が賛同したのであれば仕方ないといって納得していた町会長たちが、今度は意欲ある区民が参加するようになり、町会長への話が後になったりすると、へそを曲げて、もう一度やり直してくれという話になったりしていないか。これでは本当に区民に浸透するような区民参加にはなっていないのではないか。これがなぜ起きてしまっているかと言えば、それだけ行政とか区政に対して興味を持ってない区になってしまっているからなのではないか。その原点が変わり、助役がもし地域に入って話をすることになった場合に、助役ときちんと話ができるのは一年に一回だからということで、ぜひ聞いてみたいという区民が100人、150人ぐらい地域で集まってくるような区になれば、恐らく今挙げられているような課題を誰がどのように解決するのかということがしっかりと決まってくるのではないか。それこそまさに「ひびきあえる 人・まち・としま」であり、そこが変わらなければ、メンバーをすげかえたりしても、原点は変わっていないということになるのではないか。「ひびきあえる 人・まち・としま」というのは、このように考えると、財政再建のための選択をどうするか、優先順位をどうするかということよりも、選択する仕組みをどうするかということのほうが大事だと私は思っている。

B委員： 戦略プランなるものを持っている意味をどう考えるかということにつながるという点で、似たことを申し上げる。戦略プランは区がメッセージとして

出しているものなのではないか。もちろん全ての施策に目配り、気配りをしていてそれは総合計画に記載しているが、その中で我々豊島区はこういう生活、こういうまちを目指しますということについてメッセージを出すきっかけ、チャンスなのではないか。例えば、響きあうようなプロジェクトを重視して、共鳴するような行政システムをつくり上げていきますということであったり、芸術文化を支えるようなプロジェクトを重視して、芸術文化のまちの創造を目指しますといったことであったりする。結果的には行政内部としては、それが本当に目的に資する施策かどうかという説明を区から求められるし、それに基づいて予算を配分することにはなる。もう一方で、先ほどの議論の中で思い出したこととして、もし戦略プランがメッセージなのだと思えば、今のこの時期に何を打ち出すかというタイミングの問題が非常に大事である。20年後、30年後も大事であるが、例えばこの3年で、あるいは5年でどういうことが世の中で起きそうで、池袋を中心とした豊島区が他の動きの中で負けないように頑張らなければいけないことを考えなければならない。そうした場合に、最も考えなければならないのは地下鉄13号線のことである。地下鉄13号線により新宿・渋谷と直結されることがこの時期の豊島区・池袋にとって大きな動きなのではないだろうか。それに対抗するべきメッセージ、それが何をもちたかということに対して気を配ったメッセージが発せられてもいいのではないか。例えば、地下鉄13号線ができて、新宿・渋谷とつながったときに、渋谷で大開発が行われ、現在池袋を拠点にしている学生がみな向こうに行ってしまうのではないかということすら懸念されている。これに対し、池袋に留まらせるメッセージ、危ないとか、力がないと思われていることに対する力強いメッセージを発信するチャンスなのではないか。今の池袋のイメージを払拭して、新しい池袋の創造を目指すプロジェクトを打ち上げる必要があるのではないか。どれぐらい重点化するかというのは実は難しいが、メッセージとして出すときには、そういうものが1つぐらいあってもいいのではないかという気がしている。特に戦略的な意味でいえば、他の動きに対し、負けないメッセージを出さなければいけないかなという印象を持っている。

渋谷部会長： ありがとうございます。各委員の意見を伺い、なかなか部会としての方向性を出すところまでは難しいという印象であるが、基本構想の「ひびきあう」ということが1つの軸になっている感がある。しかし「響きあう」が手段なのか目標なのかという違いが見られる。G委員の考え方はどちらかという手段である。お互いによく知り合って、何かを目指すという姿勢であり、O委員はどちらかというひびきあうことが目標という姿勢である。いずれにしても、目標や手段というものが連鎖して政策というものは実行されていくわ

けであるが、特にB委員の提案されたメッセージ性、方向性を出して人を惹きつけるということをしていないといけないということが1つの共通認識としてあると考えている。その中で文化というテーマが1つのキーワードとなっていくという感じを受けている。各委員の意見を一つにまとめるのは難しく、実は私も本日そこまでまとまるとは考えていなかった。突然、戦略プランが提出され、私自身も戸惑っているところが実はあり、司会の手順が悪くて申し訳ないが、いずれにしても本日いただいた意見を元に、第1部会の議論ともあわせて方向性を示していくことになる。本日の議論はこの辺でよろしいか。非常につたない司会で申し訳なかったが、本日も暑い中、参加いただきありがとうございました。いただいた意見には何となく共通の部分があったように思うので、それをもう一度、第2部会の意見という形で全体会に報告させていただき、個別の問題に落とししていきたいと考えている。まだ若干時間があるので、何か意見があればお願いしたい。

J委員： 資料Ⅱ－7－2の課題に違和感を覚える箇所がある。都市の地盤沈下という言葉が出ているが、これは豊島区と読み替えると、「豊島区の地盤沈下」となり何と比べて沈下しているのかがよくわからない。他にも都市間競争とあるが、例えば品川区と豊島区を比べても、目指す方向も異なるので競争しても仕方ないのではないか。確かに品川駅は新幹線が停車するようになり、2.5%程度乗降客が増える他、高層ビルもたくさん建設されているが、豊島区では高層ビルを建設すべきといったことはこれまでの計画で何も述べられていないし、比べること自体がおかしいような気がする。この課題等をもう少し整理していただかないと、戦略プランをまとめる上での認識、ベースが揃わないのではないか。この辺の認識がずれているような気がする。

渋谷部会長： それでは、この都市の地盤沈下、都市間競争の激化について、行政側がイメージしていることが一体何なのかを説明いただきたい。

事務局： 都市の地盤沈下については、先ほどI委員からも話があったが、これは池袋を中心とした豊島区の地盤沈下ということである。J委員、I委員から発言があったように、まず1つの指標として、JR各駅の乗降客の状況がある。手元にあるデータで、昭和63年、平成4年と、10年、14年の比較をすると、品川駅は+22.9%であり、23区平均は-0.24%となっている。これに対して池袋駅が-6.6%と上野駅は-13.9%となっている。このデータでみると、やはり都市の地盤沈下が想定され、また地価公示の値段を見ても、豊島区の下落率は、住宅地・商業地ともに激しい状況である。これが「都市の地盤沈下」として把握している例である。また、都市間競争については、確かに表現がふさわしくなかったと考えているが、これは豊島区が抱える池袋副都心が、品川、渋谷、新宿といった他のエリアとの競争では必ずしもトップグループ

にいたるとは言えないということを示そうとしたということである。

J委員： 都市の地盤沈下で乗降客が減ったという現象により、暮らしやすくなった可能性はないのか。その点で認識が合っていないのである。副都心や高層ビルに住みたいと思わないので、JRの乗降客が減ることが問題だと言われても、認識がかみ合わない。

I委員： 文化についてであるが、目に見える文化というのは、例えば劇場、図書館、学校などであるが、そういった施設がどういう形で運営され、どういうふうサービスが享受されているかということが文化を考える上で非常に大事なことである。また、芸術、学問、教育というレベルではなく、生活文化という考え方もある。暮らしというものは全て文化である。私が一番言いたいのは、路面電車という発想は、池袋が新宿や渋谷と比べて地盤沈下している状況で、池袋の特色を出すのに最適のものであるということである。かつては池袋駅から神田駅の方まで都電が通っていたのである。今回、雑司ヶ谷駅までつなげる、サンシャインとつなげるといった案が出ているが、これはやり方によっては非常に楽しい話題として受け入れられる可能性がある。繁華街がにぎわいを増すということと、住宅街が憩いの場として、安らぎの場として親しめる空間になるということは矛盾もするが、同時に両方を達成させる方法はあるのではないか。なぜならば、池袋は繁華街であるが、同時に鬼子母神、法明寺、雑司ヶ谷墓地という3つの緑地帯によってそれ以上拡大しないように配置されており、その外側は住宅街としていまだに生存しているからである。池袋西口も要町、長崎などよい住宅街を持っている。それからもう1つは、巣鴨には地蔵様と植木市という伝統があり、江戸時代からの文化を伝えてきている。こういう土地特性を生かし、「としまらしさ」というものを考えるべきであるので、私は歴史を抜きにした「としまらしさ」というのは考えられないと思う。もちろん未来が大事であるが、未来を考える上で歴史をもっと大事にしなければならないというのが自説である。

M委員： 確かに地盤沈下は起きている。豊島区に主要な支店を配置している企業、例えば都市銀行の支店長や証券会社の支店長と話をすると、みな悲鳴を上げている。池袋は副都心でありながら豊島区は前年度比10%、2桁台の落ち込みを見せている。他の副都心である渋谷や新宿は2桁とまではいかないが、上昇している中で、池袋だけ落ちている。この状況では、池袋支店をこれ以上展開することはできないし、現状どうやって維持していくかということに頭を費やしているという答えが返ってくる。銀行はさらに統廃合して、これからさらに支店を整理していかなければならなくなる状況では、副都心・池袋の経済としては非常に難しい状況になる。そこで、その副都心としての立場を守るために施策を打っていくのか、それとも副都心という立場ではなく、

違う形で池袋を再生させていく施策を打つのか。その議論をしなければいけないのではないかと。そしてそういった議論をこの場でしなければならぬのではないかと。

渋谷部会長： 他に意見はあるか。我々の共通理解というか、これから議論すべき事柄が明確になりつつあるが。

I 委員： もう1つ発言させていただきたい。東京は少しずつ西に発展していくという1つの大きな趨勢があり、旧東京は軒並み落ち込んでいる。上野、本郷などが旧東京である。区内では駒込や巣鴨、それから、池袋も旧東京に入る。それに比べ、田園調布、自由が丘のある東急東横線沿線から渋谷・品川までは活気があり、東京は西へ西へと発展していつている。都庁を丸の内から新宿に移したのも一つの象徴的な事柄である。これは1つの大きな趨勢なのであるから、何も品川と競って高層建築をつくる必要もなければ、渋谷や新宿と同じような巨大都市になる必要もない。私は、新宿はまちとしては巨大すぎると思っている。巨大過ぎるので、行くと疲れてしまうことがある。池袋は、何も副都心として気張る必要はなく、良いまちをつくっていけばよいと思いつている。西へ行く流れがいつ止まるのかは、人知では計りがたい大きな趨勢である。

渋谷部会長： それでは各委員の意見を伺い、この部会として意見をまとめるということは無理であったのでそれはしないこととする。おおむねどういう意見が出たのかを、今後の全体会あるいは部会の方向づけに生かすために、プランの中に入れていきたいと考えている。それでは大体予定された時間であるので、このくらいで議論を終了する。最後に事務局から連絡事項をお願いする。

事務局： 次回以降であるが、昨日及び本日いただいた意見をもとに庁内で検討し、その上で会長・部会長と相談をさせていただく。その上で9月以降の会の持ち方についても検討し、各委員に案内を申し上げたい。なお、8月については、審議会はお休みにさせていただきたいと考えている。連絡事項は以上である。

渋谷部会長： それでは、長時間にわたりましてご審議いただきまして、ありがとうございます。これもちまして、本日の部会を閉会とさせていただきます。どうもありがとうございました。

閉会

会議の結果

- ・としま戦略プランについて、継続審議
- ・開催日程 9月以降開催予定

提出された資料等	【配付資料】 Ⅱ-7-1 「(仮称) としま戦略プラン」の位置づけ Ⅱ-7-2 「(仮称) としま戦略プラン」の背景等 Ⅱ-7-3 計画事業(想定)一覧
その他	